

# 龍源寺報

2010. 3. 10

臨濟宗・妙心寺派	住職	松原哲明
副住職	松原哲行	
閑栖	松原哲行	
正福寺住職	松原哲行	
TEL	3451-1853	
FAX	3451-6094	

振込 00160-0-104918 東京都港区三田5丁目9-23 (郵便番号 108-0073)

Email: ryugenji@ryugenji.com URL: http://www.ryugenji.com

## 生老病死

「柳は緑、花は紅」にも書きましたように、昨年来、慢性心不全の連発で四回も入院を繰り返し、お正月も病院で過ごし、府中の榊原記念病院、新年初の心臓手術を受けました。執刀医から心臓の血液を空っぽにして、心房中核欠損症の穴を閉鎖し、小尖弁・僧帽弁を人工弁と交換、心房細動の手術をすると、いとも簡単に説明を受け、合併症には腎臓透析のリスクがあると言われた時には、生きる望みを遮断された思いがしました。と同時に、自分の命でありながら、もう一切自分では関与できない遠いところに行ってしまったし、一切は医師が私の命を握っていると感じました。こんな大手術では、生きられるはずはないでしょう。こうなると、七〇年間生きてきた過去の実績なんて全く関係ない。過去のことは語れないと言うが「なるほど」と思ったものです。まな板の上の鯉状態の自分の現況だって全く分からない。同じく、現在の心も説明できません。手術後は一体どうなっているのか？ 自分では見当もつかない。だって、目が覚めないと確信できないでしょう。

未来も目が麻酔から覚めて初めて開ける。未来心も得られない。つまり、「生老病死」一切が分かっているなかつた。

入院患者の生活から体感したのは、生きている時はチャホヤされていたが、老いてくると疎外され、病気になれば隔離され、死を待っただけでした。ある患者の家族は、手術待機の長時間をトランプゲームで消費していました。見舞い人もいない。身内でも、他人ですから、そんなものでしょう。死を予感しているから、病人は患者同士が語ることもなく、押し黙ったまま。話してもどうにもならないからです。鬱になっていく。

そんな病人を憐れんのか、手術される間、患者は意識不明。生きるか死ぬか、本人には関係がないからか。死への悲哀を奪い尽くしてくれるのでしょうか。

再び蘇った私。死後、極楽に縋ることなく、一切が露と消える、と言う禅佛教思想を根底に、生老病死を窮め尽くす。ここが、彼岸の悟り。どう窮め尽くすのか、お互いに頭のひねり所ですね。

ラオス、カンボジア、ミャンマーは東南アジアを代表する「仏教国」である。ラオスの古都ルアンパバーンでは、その仏教国らしさが特に厳粛に感じるのはなぜだろうか。歴史を振り返れば、この国は仏教国として多くの危機に直面してきた。特に一九七〇年代の社会主義革命で仏教が拒否され、一〇〇に近いと言われる寺院や托鉢修行はもとより、そこで生活する僧侶の存在意義さえ脅かされた。しかし、一九八〇年代半ばからの開放政策(経済、政治、文化等における自由化運動)や一九九五年の世界遺産登録を経て、世界がこの小さな山間の町を注目するようになる。二〇〇四年にはASEAN首脳会議の議長国としての大役を果たした。この時代の激動の中で、ラオスの人々の精神的支えとなったものは間違いなく仏教である。これは人々の寺院と僧侶への帰依や日常生活に深く浸透した信仰の中に表れている。

ルアンパバーンの一日は僧侶の托鉢から始まるといってもよい。早朝五時三〇分。朝もやがまだ立ちこめるメイン通りのチャオファ

ーグム通り沿いに、多くの人たちが膝まずいでお供えを用意して僧侶を待つ。私は前日に市場で買っておいた果物を持参した。耳を澄ますと、ひたひたという足音とともにオレンジ色の袈裟をまとった僧侶が一行になってこちらにやってくる。驚いた。その数は十人どころではない。四〇人近くはいるであろう。持っている果物は足りるだろうか。老僧を先頭に、青年僧を始め、まだ小学生ぐらいの小さな「かわいい」僧もいる。これだけの数の僧が一行になって練り歩く光景は圧巻で、それだけで絵になるが、それ以上に、通りすぎる僧侶一人一人に一礼をし、無心になって喜捨を与える人々の姿は忘れられない。その喜捨を受ける僧侶のバスケットは、お米、果物、甘物、お金が一緒になって一杯だった。

ルアンパバーンの船着場からメコン川を上ること約一時間半、メコン川がナムウー川と合流するところにあるパークウー洞窟を訪れた。ここはポートでしか近づくことが出来ない断崖にあり、つまり、川に面した切り立った崖にくり抜かれた洞窟で、中には大小約四〇〇体以上の仏像が置かれている。長い年月をかけて、多くの人たちが祈願をこめて納

めていったのだという。薄暗い洞内に大小無数の仏像が隙間なく並ぶ姿は圧巻である。この地もまた、多くの人で一杯だった。おじいちゃん、おばあちゃんもいる。若者も女性もいる。立って合掌してお参りをしている人もいれば、坐って上半身を地につけて一心にお祈りをしている人もいる。ただ静かに坐って瞑想している人もいれば、ただぼんやりしている人もいるし、また、小声で話している人もいる。ルアンパバーンが世界遺産へ登録されて十余年が経過し、ルアンパバーンの町も、そしてこの洞窟も、確かに押しも押されぬラオスを代表する観光名所になった。それに伴って、これらの地の様々なものが観光地化され、西洋化され、中には托鉢見学に代表されるように仏教儀式が「風物詩」化されてきた。メコン川を見下ろしながら仏像が並ぶアンクルでのスナックショップ販売などは、観光化のいい例である。しかし、これらの地がラオスの人々の生活を支える精神文化基盤の中心になっていること、そして、仏教が人々の日常生活に深く浸透し、生きることの支えになっているということは、今でも何も変わってはいない。

ラオスでは、男性は二〇歳までに必ず一度は僧院生活をしなければいけない。その為もあるのか、僧侶に対する違和感が全くない。

一人の青年が言う「子供が生まれてから、すぐに寺院に行ってお参りをした」と。ある青年は言う「来年結婚予定だから、その前にもう一度僧院に戻る」と。「大学を卒業して、就職する前に僧院にもう一度行った」と言う者までいた。寺院は人生の通過儀礼に欠かせないものになっているのである。彼らにとっ

て寺院は気軽に訪れることができる場所なのであり、生活に自然に組み込まれているのである。

このコラムは、「ラオス、カンボジア、ミャンマーは東南アジアを代表する仏教国である」という一文で始まった。日本もまた仏教国といわれる。実際のところ、他のアジア諸国の人たちと話をする時には「仏教国」ということで、相手に親近感を与えることさえできる。しかし「日本も同じ仏教国ですね」と

聞かれるならば、今、正直強い戸惑いを感じる。もう一度言おう。ラオスでは仏教が人々の生活に深く浸透し、彼らの生き方を支えている。いいかえれば、信仰と日常が一体であり、人々の中に仏がいるのである。ラオスの仏教はまさに「生きて」いた。それは、日本では感じることでできない貴重な体験であった。

(つづく)

松原正樹

▼生前母がよく言っていた。七〇

柳 緑 歳とか言うきりのいい年は越えに  
くいと。昨年古稀を迎えるに当た

花 紅 っって、母の言葉が頭をよぎった▼

その七十才の昨夏、父母が去った。

そして通夜・葬儀と次々と逝った。三人の息

子達が、母の時と同じようにやってくれた▼

くたびれ果ててしまったのか、両親を曲がり

なりに送り返してしまつたのか、両親を曲がり

燃え尽き症候群になった。身辺整理をを始め

たのである。住職を交代し、仏母寺に入り、

また次男を副住職にすえ、すべての登記を終

えた▼若い三男を大きく独り立ちさせるため

に、両親の百箇日のお別れ会の司会に据えた。

六〇〇人の参加を超えていた。これでもう何

も心配することはなくなった。母の埋骨、父

の墓所改築も終わり、一周忌の全てを息子達

に依頼して、家内を連れて長期国内旅行に出

かけ、慰労したつもりであった▼慢性心不全

がまた再発した。十二月に入って四日市での

講演が危うくなってきた。そこでまた講演準

備のためにC大学病院に入院したのである。

この年四回目であった。そして何とか体調を

だまして講演会を済ませた▼医師は言った。

年に何回も心不全を起こしている、心臓が段

々弱ってきているし、腎臓も悪い。ここで決

心して心臓の手術をした方がいい。リスクは、

腎臓の透析もあるが、いま手術しかない、と

の引導を渡されて退院した▼四日市での講演

も済んだ。自分では、最後の仕事ではないか

とふと感じていた。そして榊原記念病院にそ

のまま転院したのである。十二月二十一日で

あった。その日に、二〇一〇年一月六日、新

年早々の手術と決まった。だから正月も病院

に入ったままであった▼病中回想している。

生きたいから、手術がすんだら、あれもこれ

もしたいと欲が広がる。が、なんだかんだ欲

を言っても手術が済んで、実際にパチリと目

が覚めないと、夢は実現しないのだ。人は、

目をつむって夢を見るが、本当の夢は目をパ

チリと開かないと見えぬ▼日は東に昇るが、

生きていれば事実だが、死んだ人には見えぬ。

太陽は実体のようであるが、死んだ人間には

夢・幻に過ぎない。般若心経の色即是空、存

在は現象ということはここであった。生者か

らすれば、宇宙には事実と思われる状況が展

開しているが、死人には、一切が夢、現象に

過ぎないのである。死人は目が覚めぬ以上、

一切は現実ではない。実際は太陽が昇ってい

ても、死人は知らないからである▼現象自体

が存在だと言うのが、空即是色である。これ

は死者側からの存在に対する生への憧れであ

ろうか。そんなことを手術から蘇生したとき

にまず思った。今後ゆっくり考えるところ

▼手術のことは知らない。朝九時に始まって

夕方終わったらしい。心房中核欠損の穴を閉

鎖し、二つの弁を人工のと取り替え、心房細

動を治療してもらった。心臓を空っぽにして、

人工心臓と、名医・神の手によって目がパチ

リと開いていた。一時、出血が多くて胸を閉

じ、おさまって再開したと聞いた▼多くの方

に助けていただいた。なんと感謝して良いか

分からない。生きていること自体が信じられ

ない。みなさんにはご心配をかけるから黙っ

ていた。申し訳ない。思うに、生前の母には、

心臓手術のことを一切知らせていないのが最

大の親孝行だと信じている▼しばらく療養し

たい。息子達の時代になった今、甘えていた

い。お彼岸には、復帰したいと欲を出してい

る。が、これも分からない。(哲明)